



平成25年6月17日

## 卓話『日本人の覚悟』

ジャーナリスト  
株式会社鳶ネットワーク 代表取締役  
鳶 信彦 様

今日は「日本人の覚悟」がテーマです。私は今の日本人に一番欠けているのは覚悟じゃないかと思っています。3.11の大震災から2年経ってまだ復旧復興の槌音が聞こえてこないのも、日本人の覚悟がピシッと決まっていなかったことがあるのかなと思います。最近、覚悟が成功させたんだと思うのは、JAXA川口氏が「はやぶさ」を作って火星の小惑星イトカワから試料を取って来たことです。3億キロ離れたイトカワの平地に降りるのは、日本から衛星を飛ばしてアフリカの大地に置いた10円玉に着地させるようなもんだと聞きました。これは凄まじいことで、それまで何度も失敗していたために、本当にこれが最後だという覚悟でやったんだろうと思います。月旅行以外で太陽系に衛星を飛ばしサンプルを持ってきたのは世界初です。

2050年には日本の人口は9000万人前後になります。年平均で70万人ぐらい減るわけです。しかも2100年には4700万人になるといわれていて、そうなるともう本当の中堅国家です。そういう中で日本はどうやって生きていくかということが今、問われています。ここ200年を見ると第一の国難は幕末明治維新ですね。徳川が倒れて長州や薩摩が権力を握ろうという争いが起こる。清国の海岸線はイギリスやフランスなどの植民地になっていました。幕末明治維新は植民地になる危険と国家が大混乱に陥ってしまうという内憂外患を抱えていた。このときに立ち上がったのが脱藩し死を覚悟して日本中を動きまわった若い世代。坂本龍馬や中岡慎太郎、吉田松陰などが日本も近代国家を作らなきゃいけないという思想を掲げて土台を作りました。1868年に明治維新があって第一次伊藤内閣ができるのは1885年。20年近くに亘って沢山の欧米使節団が世界の近代国

家とは何かを調べて回ります。当時の外国人によると、日本人は髪はぼさぼさで洋服も粗末だけど目が爛々と輝き、その凛とした雰囲気は辺りを圧するものがあつたそうです。そこには日本を再建しなきゃいけないという覚悟があつたんじゃないかと思っています。その後の第二次世界大戦で日本は無条件降伏。第二の国難です。その時に日本を再建したのも若い人が中心でした。官庁もマスコミも教育界も、偉い人たちはGHQによって全部追放されたからですね。財閥も解体されました。当時の日本は世界中から冷たい目で見られていたけれども、それを撥ね返す覚悟を持っていたことが非常に大きかったんじゃないか。その後二クソショックやオイルショック、バブル崩壊という苦難があつたにも関わらず、日本は今第3位のGDP大国ですが、内向き、自信喪失が目立ち第3の国難と言われていいます。もう一度我々は過去の歴史を見て、くじけることなくやって行けるという自信と覚悟を持つことが大事だと思います。

20世紀は資本主義の時代でしたけれど、21世紀の思想はどう行くべきなのかということで、今「共同体の徳」と「公益」が大きなキーワードになりつつあります。奉仕やコミュニティーの精神、人間の品性といったようなことがロータリーの精神だろうと僕は思いますけれども、公益という言葉はそれに通じると思います。是非、ロータリーからもいろんなことを発信していただければと思います。ありがとうございました。

